

I

---

はじめに

## 1 計画策定の趣旨・目的

総合計画は、長期的な将来展望に基づき、市政運営を総合的かつ計画的に進めていくための根幹となる計画です。

これまで本市では、平成 13（2001）年度から令和 7（2025）年度までを計画期間とする「市川市総合計画（I&I プラン 21）」を策定し、「ともに築く 自然とやさしさがあふれる 文化のまち いちかわ」を将来都市像に掲げ、その実現に向けて歩みを進めてきました。

しかしながら、今後は、これまでのような人口増加は鈍化し、少子高齢化も加速することが見込まれるため、それに合わせたまちづくりを進めていかなければなりません。また、高まる自然災害のリスクや年々深刻化する地球温暖化、都市インフラの老朽化、不安定な経済情勢、格差の拡大といった問題には、スピード感を持って対応していかなければなりません。

このように大きく変容する時代の潮流の中において、本市は、この「市川市総合計画 2050」を通じて、本市のあるべき姿とそこに進むべき方向性を明示し、令和 32（2050）年度までにその実現に向けたまちづくりを進めていきます。

## 2 計画の構成・期間

本計画は、「基本構想」「基本計画」「実施計画」の 3 層構造とし、計画期間を令和 8（2026）年度から令和 32（2050）年度までの 25 年間とします。

なお、「基本計画」と「実施計画」は、「地方版総合戦略」を包含するものとします。

	内 容	期 間
基本構想	地域における総合的かつ計画的な行政運営を行うために、目指すべき将来都市像や基本目標を定めています。	25 年間 令和 8（2026）～ 32（2050）年度
基本計画	基本構想で明らかにした将来都市像や基本目標を具現化するための基本的な施策を定めています。	9 年間 令和 8（2026）～ 16（2034）年度 ※期間終了後は次期計画を策定
実施計画	基本計画に示された施策を実現するための具体的な事業を定めています。	5 年間 令和 8（2026）～ 12（2030）年度 （毎年見直し） ※期間終了後は次期計画を策定

※「基本構想」と「基本計画」は、令和 8 年 2 月市川市議会定例会にて議決されたものです。

※「地方版総合戦略」は、「まち・ひと・しごと創生法」に基づき、地方公共団体による策定が努力義務とされた地方創生に係る戦略です。

### 3 計画策定の背景

#### 1 市の概要

本市は、千葉県の北西部に位置し、北は松戸市、東は鎌ヶ谷市と船橋市、南は浦安市と東京湾に接しています。また、江戸川を隔てて東京都（江戸川区・葛飾区）と相対しており、東京都心から20km圏内に市域のほぼ全体が含まれています。

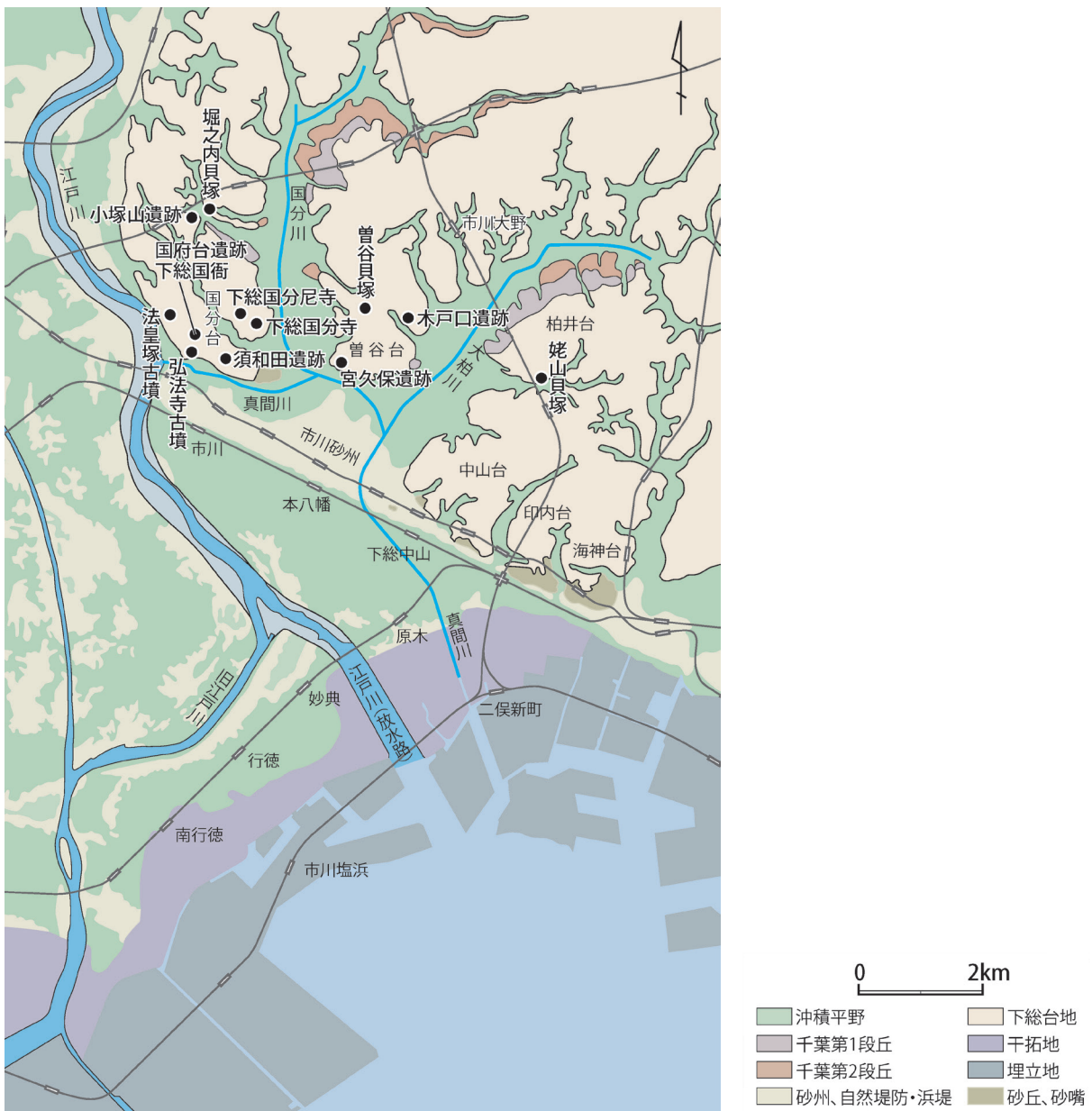
昭和9（1934）年に市川町、八幡町、中山町、国分村の合併により「市川市」が誕生し、その後、昭和24（1949）年に大柏村、昭和30（1955）年に行徳町、昭和31（1956）年に南行徳町と合併しました。さらに、昭和37（1962）年以降の公有水面の埋め立て（高谷新町、二俣新町、塩浜など）により、現在の市域が形成されており、総面積は56.39km<sup>2</sup>となっています。



## 2 歴史・文化

# 原始・古代

本市は下総台地と南に広がる沖積平野によって構成されています。下総台地上には、先土器(旧石器)時代に始まり、縄文時代の生活がうかがえる堀之内・曾谷・姥山などの貝塚、弥生時代の農耕文化の痕跡を伝える須和田・国府台・木戸口・小塚山・宮久保などの遺跡、そして、古墳時代の法皇塚古墳や弘法寺古墳など多くの遺跡が残されています。また、沖積平野は、遅くとも室町時代には開拓されていました。



▲市川市の地形分類と遺跡

飛鳥時代には、国府台に下総国衙（国府の中心地）が置かれるとともに、奈良時代には、国分に下総国分寺・国分尼寺が建立され、地方都市の中心として栄えました。この頃の真間の入り江の情景などは、万葉集に詠まれています。

平安時代には、関東で平将門の乱が起こり、駒形大神社など市内各所に将門伝承が残されました。



▲国衙・国庁全景



▲国庁での儀式

## 中世

鎌倉時代には、源頼朝の重臣であった千葉氏が下総の守護に任命され、市域は千葉氏の領地となりました。千葉氏とその家臣たちによって信仰されたのが日蓮宗です。日蓮は幕府などからの弾圧の中、鎌倉と生国である安房国を往来し、度々、市域の大半を占める八幡庄の若宮館（現中山法華経寺奥の院）に滞在しました。これにより信仰が広まり、中山法華経寺をはじめ、多くの日蓮宗寺院が建てられました。

室町・戦国時代には、行徳地域に多くの寺院が建てられ、現在の寺町の基礎が形成されました。



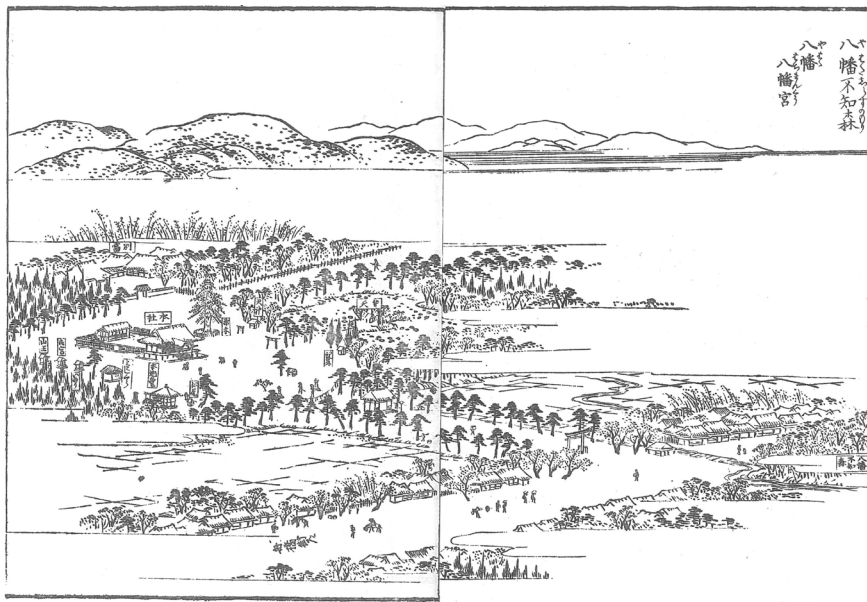
▲中山法華経寺



▲現在の寺町通りの様子（妙典）

# 近世

江戸時代には、市域が徳川幕府のお膝元となり、千葉街道（現国道14号）が整備されるとともに、江戸川に関所が設けられました（現京成線の鉄橋付近）。八幡は宿場町となり、中山周辺は法華経寺の門前町として栄えました。また、真間から八幡にかけては、江戸時代の中頃から商品作物として、梨が栽培されるなど、都市近郊農村の性格を帯びていきました。行徳地域は町場となり、江戸・行徳間を船が行き来し、年貢米や野菜類、魚類、海辺で盛んに製造された塩などの重要な輸送路となりました。物資だけでなく、江戸方面からの旅行者なども船を利用して本行徳の行徳河岸へ訪れ、そこから陸路で船橋方面に向かいました。特に成田詣をする人々が多かったため、その道（現県道179号など）は成田道と呼ばれました。



▲江戸名所図会（八幡不知森）



▲江戸名所図会（行徳船場）

## 近代

明治時代には、国府台に軍隊が駐屯したことにより、周辺地域が町場となりました。また、明治 27（1894）年に総武線（現 JR 総武線）が開通し、都市化の萌芽となりました。

大正時代に入ると、大正 3（1914）年の京成線の開通や、大正 8（1919）年の八幡地域を中心とする大規模な耕地整理の完了により、工場や宅地となる条件が整い、都市化が進みました。江戸川放水路も、江戸川周辺の水害防止を目的としてこの頃に開削されました。その後、大正 12（1923）年の関東大震災や昭和 20（1945）年の東京大空襲により、東京方面から多くの人々が市域に移り住みました。この頃、豊かな自然が残る真間川周辺に、北原白秋や幸田露伴、永井荷風などの文人が居住し、多くの作品を残しています。



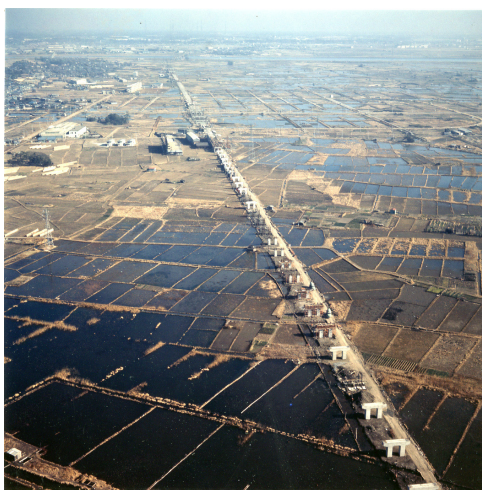
▲野砲兵第十六聯隊営門写真（国府台）



▲江戸川放水路の開削  
（写真提供：国土交通省 江戸川河川事務所）

## 現代

戦後はさらに都市化が進み、軍用地があった国府台に大学が開校するなど、文教都市の様相を呈するようになりました。行徳地域では、昭和 44（1969）年の東西線の開通、区画整理、東京湾の埋め立てにより人口が急増し、現在の賑わいにつながりました。



▲東西線工事風景  
（写真提供：地下鉄博物館）

※本計画の冊子化に際して、伝わりやすさを考慮し、一部表現を整えています。

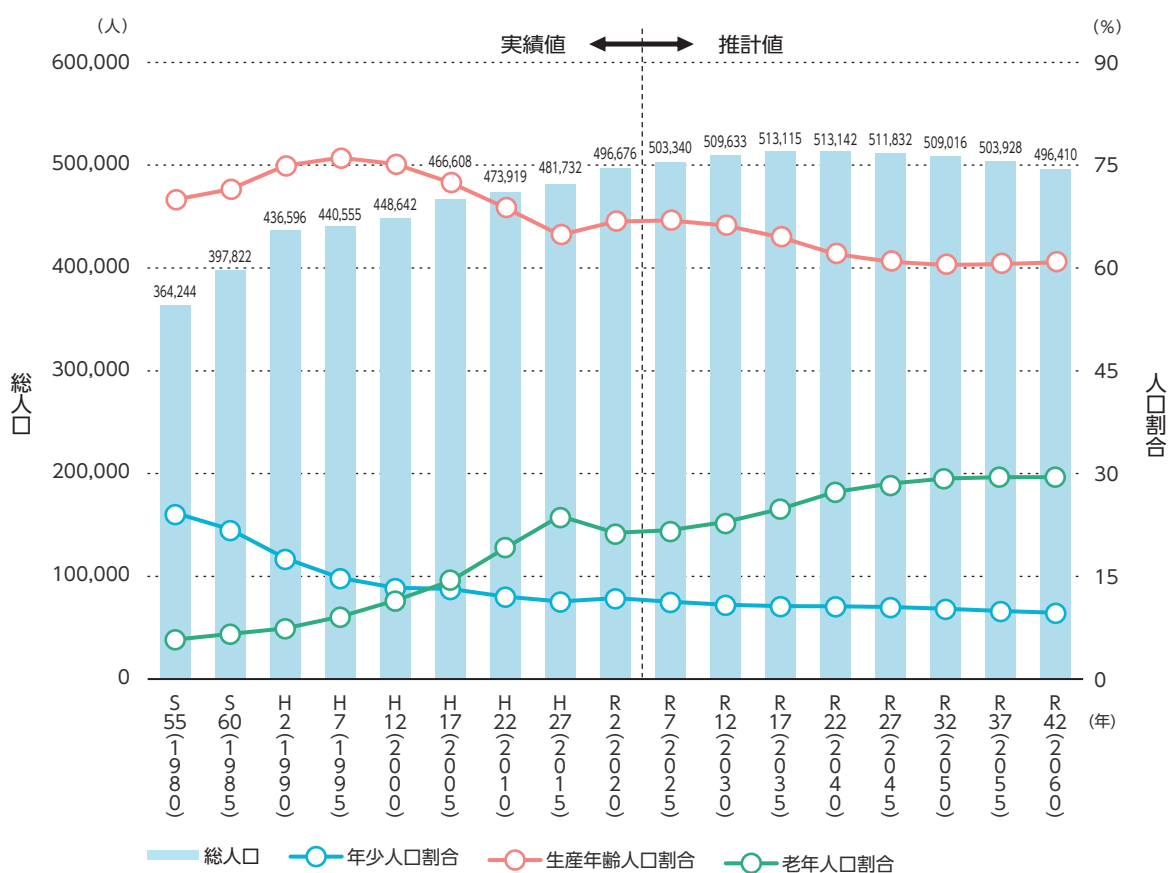
### 3 人口

#### ① 総人口と年齢別人口割合

本市の総人口は、これまで増加傾向にありましたが、令和 22（2040）年ごろにピークを迎え、その後緩やかに減少することが見込まれています。

また、年少人口と生産年齢人口の割合が減少する一方、老年人口の割合が増加し、今後はその傾向が更に拡大し、少子高齢化が進行していくことが見込まれています。

総人口の推移・年齢3区分別人口割合（実績値・推計値）

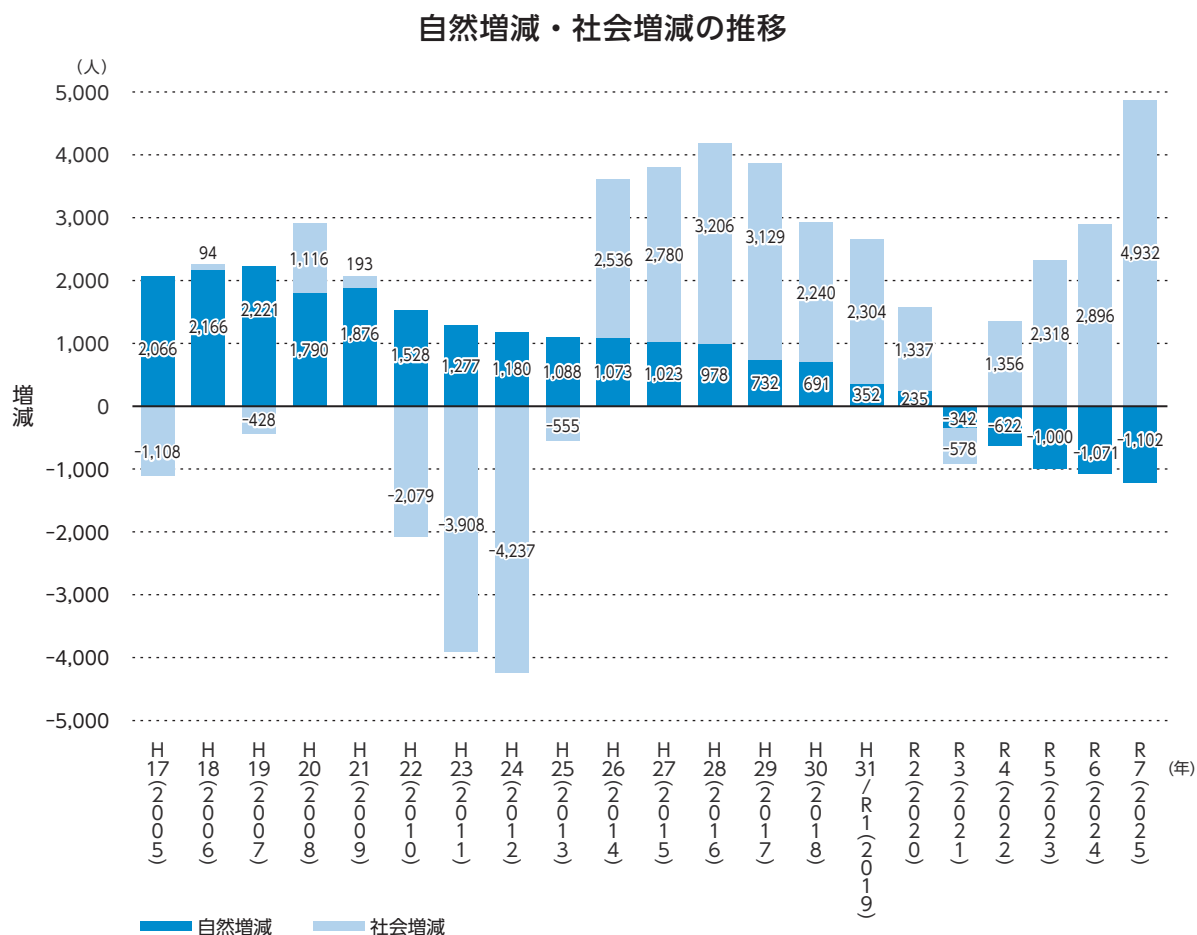


<実績値> 国勢調査人口（各年 10 月 1 日現在）  
 <推計値> 令和 7 年度実施将来人口推計（基準値維持モデル）  
 ※詳細は資料編（P130～132）参照

## ②人口動態の特徴

本市は、現在、死亡数が出生数を上回る自然減となっています。一方で、東日本大震災や新型コロナウイルス感染症拡大などが影響を及ぼしている時期を除いて、転入者数が転出者数を上回る社会増の傾向が続いています。

近年の本市の人口増は、社会増に起因しています。



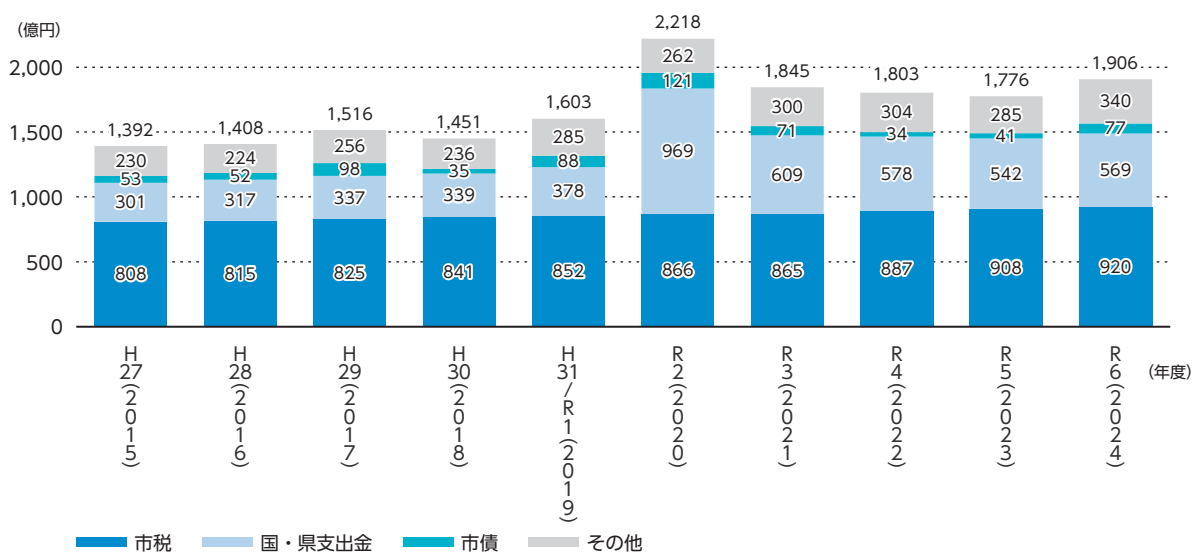
※資料：住民基本台帳人口

## 4 財政

歳入の中心である市税収入については、年々増収傾向にありますが、人口減少に直面した際には減収に転じることが懸念されています。

一方、歳出については、社会保障関係経費の増加や老朽化した施設の更新などにより、「扶助費」や「普通建設事業費」などが今後も増加することが見込まれています。

### 歳入の推移（一般会計／決算額）



### 歳出の推移（一般会計／決算額）

